
泉

くろひつじ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泉

【Nコード】

N5647P

【作者名】

くろひつじ

【あらすじ】

森の太木に住むティエンティは、歌を歌いながら、自分を置き去りにした父が迎えに来るのを待っていた。ダークファンタジー。

山の麓には、気味が悪い程真緑の森が広がっていた。

山の向こうには集落があったが、高く険しい道のりは獣でさえも力尽きることが多く、まして常人が森まで辿り着いた事は一度としてない。

そのおかげで木々を切り開かれて凌辱されることもなく、陽光が地面に全く当たらない程生い茂っている森の中央に、たった一つだけ、開けた場所があった。

そこには天まで届くかと思われるほどの大木がそびえ立ち、朝陽の下で光り輝いていた。

ティエンティはその大木の中程にある枝の上に腰掛け、信じられない程透き通った美しい声で歌っていた。

空の王は闇の衣を脱ぎ捨て

今大地に降り立った

森の子らよ 風となり雲となり

王の元へいざ行かん

女王が星を枕に目を閉じて

緋色の逢瀬を思い描く間

一度も梳かした事のないさばさの黒い毛に、狂人のようにぎょろりとした瞳、異様に突き出した口。一本も指のない二つの手に、頂上の枝よりも細い足。

皆が彼女を醜いと言う。

だが彼女の歌には聞く者の心を打つ何かがあった。

朝を告げる冷たい風に吹かれても、僅かに葉がそよがせたきり、また深い眠りに入ろうとする大木は、今はこの歌に合わせ、海の波のように抑揚をつけて揺れている。

彼女自身、幼い頃父から感情の高ぶるようなこの歌を聞かせられると、どんなに瞼が重くても、たちまち目が冴えてしまったものだ。長い年月の間に父の顔を忘れても、この歌は思い出と共に蘇り、語り継がれる。

ふと目を上げると、鷹が風に乗って、上空を緩やかに旋回していた。

（わたしも鷹になって、ある日わたしを置いていなくなってしまった父を探せたらどんなに良いか。けれどわたしは人間で、空を飛べる筈がない。所詮叶わない夢なのだよ）

そう思っただけ顔を戻すと、狼の兄弟達が母親の周りではしゃぎながら追いかけてくるところを、目に入ってきた。

月が出ている時は、闇に潜む動物達が息をする音だけが聞こえていた。そんな不気味な静けさに包まれていた森は、朝になるとこんな風にたちまち賑やかになる。

（もしわたしが歌を歌わなかったなら、気ままな動物達はおのの自分の好きな時間まで眠ってしまったて、いつまで経ってもこんな幸せな森の朝は訪れない。結局わたしはこの森を離れて父を探しに行けないのだわ）

彼女は誇らしい気持ち半分、残念に思う気持ち半分だった。

「おはよう、ティエンティ。今朝も素敵な歌をありがとう」

のっそり歩く大きな熊のオーズが、大木にいる彼女を見上げて話しかけてきた。彼女の容姿を気に留めない数少ない友人であるオーズは、毎朝のようにここを通りかかっては、歌を褒めてくれる。

「褒めてくれてありがとう。オーズはどこへ行くの？」

満ちたりた気持ちになった彼女は、枝から下ろした足を宙でぶらぶらと揺らし、オーズに尋ねた。

「水を飲み」

「そう、気をつけてね」

彼女は手を振ってオーズの後姿を見送った。

オーズはこの先にある泉へ水浴びに行くのだろう。

泉は水底の石が見えるほど透き通っていて、とても綺麗な場所だと聞いた事があった。だが彼女は一度も行った事がないし、これから行くつもりはない。水面に映し出されるという自分自身の姿を見るのは怖かった。

栗鼠や鳥以外誰も上がってこれない大木の上にいつもいれば、少なくとも傷つかずに済む。喉の渴きを癒したり、身体の汚れを落とすのも、この大樹の朝露がやってくれる。

そして何より、もし泉に行っている間に、父が迎えに来て、彼女がいなかったなら、またこの森を去ってしまうだろう。だから募る思いを歌にしながら待ち続ける事になっている。

父と別れたこの場所です。

遠くから歩いてくる誰か

胸奥の心臓は

もう明日へと駆け出している

今日にさよならを

森の入り口の方から少年が足音も立てずに歩いてくるのが目に留り、驚いた彼女は歌うのをやめた。久しぶりに来る人間は、見た事の無い黒くてぴかぴか光るものを持っている。近づいてそれが何なのか確かめてみたかった。けれどそれ以上に頭を一杯に埋めている事があった。

（あれは、人間だ。父さんだったら良いな。でも顔も思い出せないのに、どうやって確かめたら良いの。覚えているのは歌を歌ってくれた時の低くて甘い声だけ）

しばらく悩んでから、ある考えが閃いた。

空の王は闇の衣を脱ぎ捨て

今大地に降り立った

森の子らよ 風となり雲となり

王の元へいざ行かん

女王が星を枕に目を閉じて

緋色の逢瀬を思い描く間

彼女は心を込めて思い出の歌を歌った。この歌を教えてくれた父ならば気づいてくれる筈だ。

歌声を耳にした少年は、顔を上げて彼女を見つめた。目が合う。

少年は少女のように端整でおとぎ話から抜け出したような顔立ちをしている。

濡れたように真っ黒な髪。

そして泉のように透き通った水色の瞳をしているのが印象的だ。

いっそ美しすぎて禍々しいと、皮肉屋のオーズなら言うに違いない。

だが彼女は一瞬で魅入られ、恋に落ちてしまう。

少年の瞳には何の感情も浮かんではいなかったが、やがて石を投げ込まれた時のような波紋が起こったような気がした。

（何だろう）

彼女は不思議に思い、少年の瞳を覗き込む。

「イ、イヤー……ッ！」

その表情が恐怖と彩られながら、彼女は悲鳴をあげた。

そこに映っていたのは、醜い化け物だった。

（忘れていた。泉が自分自身の姿を映し出すことを）

（知らなかった。自分がこんなにも醜いなんて。でもあれ？ この姿はさつき空を飛んでいた鷹に似ている）

次の瞬間、少年の眼が鋭く光った。

ズドン……！！

森中に響き渡った残酷な銃声と共に、彼女の身体を凄まじい衝撃が襲った。目の前が日の沈んだ後の夕方のように真っ暗になっていく中で、勝手に口が呟くように歌う。

遠くから歩いてくる誰か
胸奥の心臓は もう明日へと駆け出している
今日にさよならを

それからどこへ行っていたのと
泣き笑いをしながら 温かい胸に顔を埋め
あなたの声を聞く

けれど私は大地に抱かれ
頬にふれたそれは 北から来た寂しい風の子
奪われていく熱

初めて会ったこの場所なら
またあなたに会える それまでは忘れないでいよう
この思いを全て……

あなたの瞳が、好きだったのに……

「おはよう、リュシアン。今朝も素敵な歌をありがとう」
動物達の列の後ろを足を引きずって歩いている大きな熊のオーズ
が、大木にいる彼女を見上げて話しかけてきた。彼女の容姿を気に
留めない数少ない友人であるオーズは、毎朝のようにここを通りか
かっては、歌を褒めてくれる。

「褒めてくれてありがとう。オーズはどこへ行くの？」
満ちたりた気持ちになった彼女は、枝から下ろした足を宙でぶら
ぶらと揺らし、オーズに尋ねた。

「水を飲みに」
「そう、気をつけてね」

彼女は手を振ってオースの後ろ姿を見送った。

オースはこの先にある泉へ水浴びに行くのだろう。

泉は水底の石が見えるほど透き通っていて、とても綺麗な場所だと聞いた事があった。だが彼女は一度も行った事がないし、これからも行くつもりはない。水面に映し出されるという自分自身の姿を見るのは怖かった。森を歩くと、道行く動物全てに性質の悪い視線を浴びせられたり、悪口を言われたりする程、醜いからだ。

栗鼠や鳥以外誰も上がってこれない大木の上にいつもいれば、少なくとも傷つかずに済む。喉の渴きを癒したり、身体の汚れを落とすのも、この大樹の朝露がやってくれる。

そして何より、もし泉に行っている間に、父が迎えに来て、彼女がいなかったなら、またこの森を去ってしまうだろう。だから募る思いを歌にしながら待ち続ける事にしている。

父と別れたこの場所です。

そう考えていると、急にオースが振り返ったので、彼女は驚いた。「どうしたの？」

「そういえば、俺の足が悪くなるより前にも、こんな事があってな」「なあに？」

「お前は知らないだろうが、今お前がいる大木にはティエンティという鳥がいて、お前のように毎朝歌を歌って森の動物達を起こしてくれた。でもある時俺が泉から帰って来ると、地面で冷たくなって死んでいた。強い煙の匂いがしたから、悪い狩人に銃で撃たれたのだろう」

思い出に残っているからには、きっとオースにとってティエンティは大切な人なのだろう。けれどオースが感傷に浸る様子もなく淡々と言うので、彼女は切なくなった。

「復讐しようとは、思わなかったの？」

「いいや。ティエンティは生まれて間もない頃に巣から落ち、ちょうど通りかかった行きずりの名もない吟遊詩人に育てられていた。そのせいで自分の事をずっと人間だと思い、巣立ちの時期が来て置

いていかれてなお吟遊詩人を待っていた。醜いけれど、確かな翼があったのに、この大木から飛び立とうとしなかった報いだ」

「そう……本当に哀れね」

悲しくなつて彼女は言った。

「ああ。哀れだ」

オーズは彼女を正面から見据えて言った。

沼のように澱んだ熊の目は、自分の姿を映し出さないから、彼女は気づかない。

瞳の中にいるのは黒くて翼のある、ティエンティと同じ種類の鳥だという事を。

熊が泉に行った後、リュシアンは歌い出す。いつか父が迎えに来てくれるのを夢見て。

足音もたてず、誰かが森に入った。

（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。

- 作者の小説サイト ●

<http://aonoyuhi.web.fc2.com>（青の

夕日）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647p/>

泉

2011年4月2日18時15分発行